

5月18日 ゲスト卓話



国際ロータリー第2770地区
2011-2012年度ガバナー
三國明 様(春日部西ロータリークラブ)

八潮みらいクラブの皆さん、こんにちは。卓話の機会を与えてくださり有難うございます。先日は五周年記念式典、盛大に行われおめでとうございます。そして本日は250回記念例会を迎えられ、心よりお慶び申し上げます。

何と言っても三國年度のクラブ合併だったので、いろいろ心配した分、愛着を感じるクラブなのです。ロータリーは一口に言って、親睦と奉仕と自分磨きの場です。非ロータリアンへの説明としては、奉仕を通して親睦を深め少しでも世界平和の為に貢献するという事でしょうか。

ロータリーはいま激しい変革期の真っ只中にあります。ロータリーの歴史を振り返ることは、先人の歩んで来たその精神や哲学を理解し、この先のロータリーのあり方を模索する上で何かの大切なヒントを与えてくれるのではないかと思います。

20世紀頃のアメリカは産業革命の影響で、急激な工業化が進み、経済活動も極みに達しておりました。とにかく儲かればいい、その為には相手を騙してもいい、騙された方が悪いと言う商法がはびこっていました。この様なシカゴの街で弁護士をしていたポールハリスは、なんとか信頼のできる友人を作り、親睦を図り、正しい商取引を出来ないものかと、思いついたのがロータリークラブでした。だから初めは職業倫理を大切にする仲間同志の親睦団体だったのです。それが1923年に起こった身体障害児童への奉仕活動の正否を巡って、ロータリーを二分する議論が沸き起こったのです。この時、ロータリーの賢者が集まり、夜を徹しての話し合いのも

とにその危機を救ったのです。いわゆる、決議23の34と言うものが誕生し社会奉仕活動。なるものがロータリーの基本路線の1つとなったのです。

アーサー・フレデリック・シエルドンというロータリアンがいました。彼は仕事上の経験から「超我の奉仕」と言うキャッチフレーズをロータリーに導入しました。第一次世界大戦の経験からロータリーは世界に良いことをしようと言うことでアーチ・クランフというロータリアンがロータリー財団的な基金を思い立ちました。第二次世界大戦で銃弾が飛びかっている中で、戦後の平和の枠組みをロータリアンは検討していました。これが現在の国連憲章の原型になったと言われています。ロータリーの人道的 6つのテーマは、国連のミレニアム計画に関連しています。

1904年から110年ロータリーは奉仕活動を連綿と続けてきました。この間奉仕活動に参加したロータリアンの総数はどのくらいあると思いますか？ 数千万人から1億の間と言われています。私たちは今、これらの先輩の延々と続く列の最先端にいて奉仕活動をしているのです。ロータリアンとして誇らしく生きましょう。胸を張って！

しかし、時は移り、人も世の中も変わりました。これからのロータリーのあり方については10年近い期間にわたる綿密な調査と試行を経てRIの長期戦略計画が出てきました。3つの増加戦略です。会員の増加、奉仕の増加、公共認知度の増加です。これらのことを促進する為に、今現在はポリオ撲滅に全力を傾けています。これからのロータリーはどこへ向かっていくのでしょうか？ 何れにしても、クラブ運営に柔軟性を取り込み、若い世代や女性会員の入会を促すことが最重要課題であります。変化し続ける事ができる組織こそエターナルであり続けるのです。

私は最近、遠藤周作の小説、「沈黙」と言うのを読みました。江戸時代の初期、幕府のキリシタン弾圧のもとで生きた隠れキリシタンとポルトガル宣教師の話です。大抵は踏み絵を踏まずにいろいろな拷問にあい殺されて行くわけですが、キチジロウという日本人と、事もあろうにポルトガル宣教師の1人が弾圧に屈しました。その後の2人の生き方に非常に興味を覚えましたが。1587年太閤秀吉が従来の方針を変え、キリスト教徒の迫害をし始める。ポルトガルからガルベとロドリゴという宣教師が色々な難行苦行

の果てに、夜陰に紛れて長崎の近くのトモギ村に密入します。主人公はロドリゴという宣教師ですが、真の主人公はキチジロウと言う人だと思いました。キチジロウはマカオで乞食同然の生活をしていた日本人ですが、宣教師たちの道案内役をかつて同道しました。遠藤周作は自分というものの心をキチジロウを通して表現していると思いました。彼はクリスチャンの家に生まれて幼くして洗礼を受けましたがどうしても唯一の神の存在を心の底から信じるができなかった。この小説の題名、沈黙の意味するところは何か？ 次々に拷問や迫害にあって死んでゆく教徒に救いの奇跡は起こらない。神はいつも黙って見ているばかりで有る。神の沈黙は続く。キチジロウも沈黙を守り自らはキリスト信者で有ることを口にしない。でも、隠れキリシタンと潜入した宣教師の密会を自らとりもつ役をやっている。そのくせ、窮地に立たされると役人の前で何度も踏み絵を実行して見せる。

ロータリーと私の関係

私もロータリーをしながらいつもロータリーの意味を、心に問いかけている。1人の迷えるロータリアンである。これまで35年間ロータリアンとして生きて来た。ロータリーは私の人生に非常に多くの影響を与えた。でも、自分がロータリアンであることはつい最近まで他人に言ったことはない。何故だろう。私も沈黙の人であった。胸を張って私はロータリアンです、と言えないのです。何故だろう。他人に自慢できるほどロータリーを心の底から信じているかどうかという疑問がある。それともうひとつ、自分は真にロータリアンらしいロータリアンなのかという疑問である。ロータリーの「目的」はまだ分かりません。努力目標として共鳴できる。「4つのテスト」はどうだろう。実はこれがきつい。唱和するたびに心がチクリと痛む。これは単なる目標ではないからだ。ロータリーの踏み絵である。本当にこれを実行しているのか？ イエスと言えないからです。じゃあ、どうでも良いのか？ それは肯定できない。私はこの、時遠藤周作の心境になるのです。ロータリーのキチジロウになってしまうのです。